

2015年 2 月 20 日

公益財団法人 笹川記念保健協力財団
理事長 喜 多 悦 子 殿

2014年度日本財団ホスピスナース支部活動支援

活 動 報 告 書

活 動 課 題

緩和ケア分野における長崎県下の医療機関に従事する看護師の育成

所属機関・職 長崎大学病院 がん診療センター看護師長

代表者氏名 中嶋由紀子

【活動目的】

長崎県は、がん罹患率死亡率において全国平均を何年も大きく上回っており、緩和ケアにおいても必要な患者に必要なケアが提供できていないと思われる。その為、長崎県下の緩和ケアに従事する看護師育成を自身のライフワークとして活動している。

これまで厚生労働省委託の「がんにおける質の高い看護師育成事業」を今年度を含めて9年間開催し、長崎県下の認定看護師数の1/3をこの事業で育成してきた。しかし、この研修はがん看護全体を網羅しているため40日間（今年度より22日2コースに分割）と研修期間が長く受講生にとっても施設側にとっても負担が大きく参加者が少ない現状にある。その為参加しやすい形で緩和ケアについての研修会を開催する事が必要だと考えていた。今回、2014年2月にELNEC-J指導者研修を受講したことにあたり、この研修が緩和ケアについての効果的な研修であると考え、今年度ELNEC-J開催予定を検討した。ELNEC-J開催により前述の研修の受講困難であった看護師も受講しやすくなり、長崎県下の多数の看護師の育成を図る事ができると思われる。このことにより長崎県下のがん患者家族がより質の高い支援を受けることができるようになると期待される。

【活動結果】

1. 活動資金準備

- 2014年5月29日 活動計画書作成し日本財団へ活動支援申請
- 7月7日 「日本財団ホスピスナース支部活動支援金」30万円の資金拝受

2. 活動内容

- 2014年4月 研修計画概略作成
上司（がん診療センターセンター長・副看護部長）へ計画の相談
緩和ケアパートナーズ 梅田恵先生 に講師及び指導依頼
- 5月 日本財団へ提出予定の活動支援申請書作成
院内で協議後申請
（個人で拝受使用は大学病院規定で不可のため日本財団より資金を個人口座へ入金して頂き長崎大学へ寄付という形を取った）
- 6月 活動計画書作成
研修会開催日と講師決定
- 7月 開催場所の確保
講師の所属長へ講師派遣依頼送付
- 7月30日 第1回打ち合わせ 別紙議事録参照
追加講師への依頼と所属長への講師派遣依頼送付
- 8月19日 第2回打ち合わせ 別紙議事録参照
- 9月3日 第3回打ち合わせ 別紙議事録参照
- 9月5日 会場準備
- 9月6・7日 研修会開催 両日終了後担当者全員で反省会

3. 活動結果

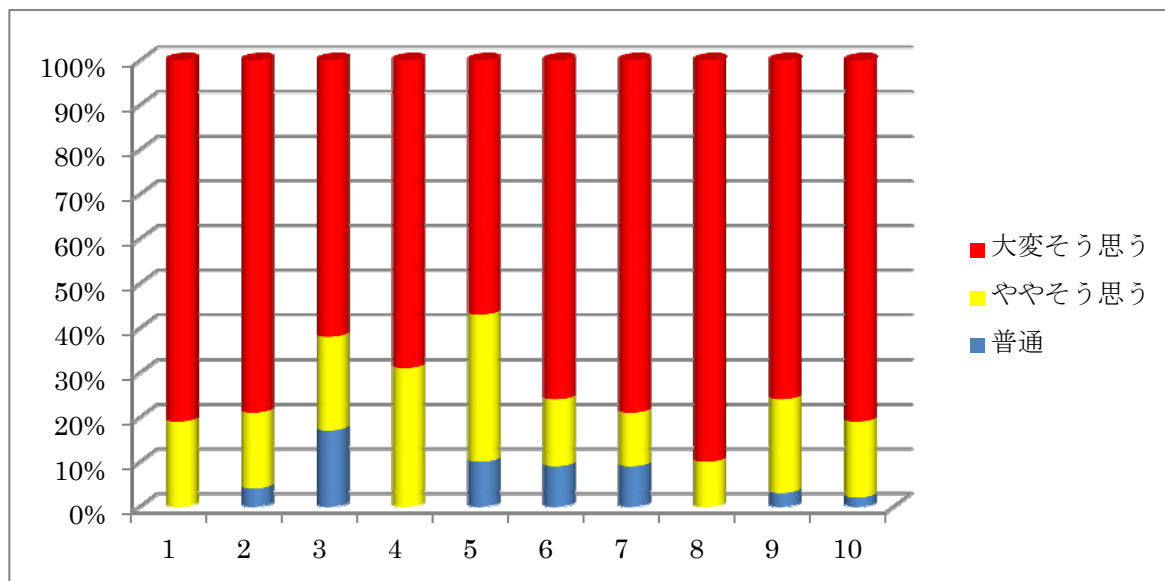
- 1) 募集人員 50 名 活動目的達成のために長崎圏域野医療機関に従事する 5 年目以上で施設内でがん看護において指導的役割を果たせる看護師とした

応募数 43 名

修了者数 42 名

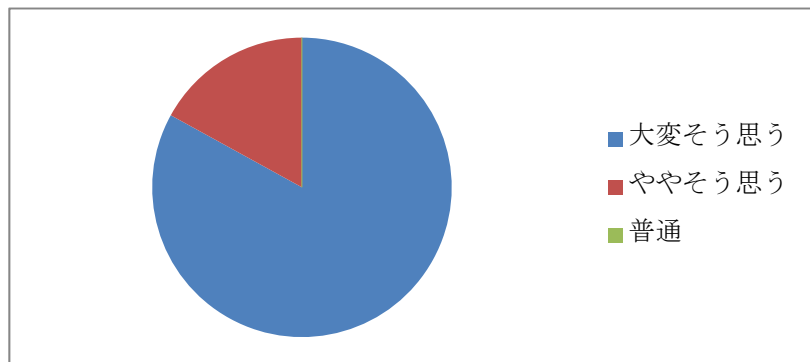
- 2) 修了生アンケート結果 E L N E C - J 指導者教育プログラム一部改変し使用

①各講義分かり易かったか

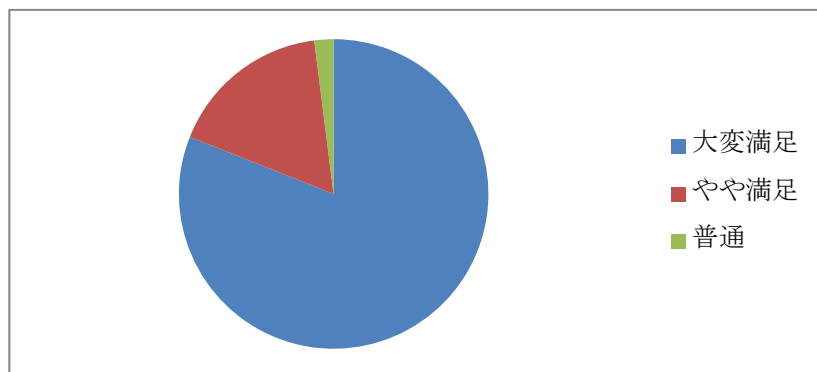


- 1 エンド・オブ・ライフケアにおける看護
- 2 痛みのマネジメント
- 3 症状マネジメント
- 4 エンド・オブ・ライフケアにおける倫理的問題
- 5 エンド・オブ・ライフケアにおける文化への配慮
- 6 コミュニケーション
- 7 喪失・悲嘆・死別
- 8 臨時期のケア
- 9 エンド・オブ・ライフケアにおける文化への配慮
- 10 質の高いエンド・オブ・ライフケアの達成

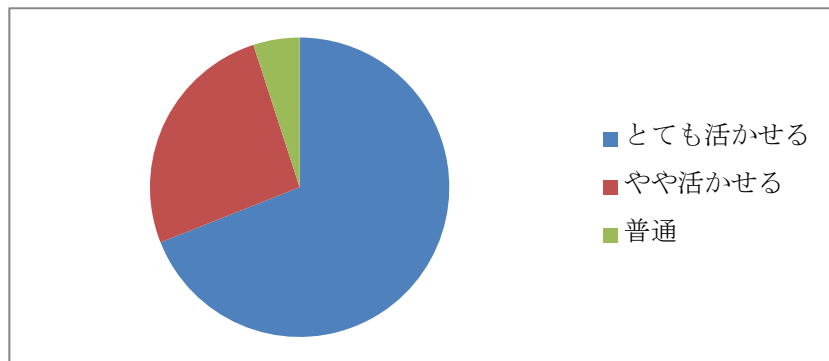
②本プログラムを受講してエンド・オブ・ライフケアの重要性が理解できたか



③プログラムの内容はあなたの期待をどの程度みたしたか



④本プログラムの内容は臨床現場で活かせるか



⑤自由意見

- ・コミュニケーションでロールプレイを実施し自分の普段行っているコミュニケーション傾向を振り返る事ができロールプレイを見る事で勉強になりました。患者家族の意思決定支援は大変難しい所ですがヒントを得る事ができました。
- ・内容的にとっても引き込まれ楽しい研修になりました。
- ・全て興味ある内容で楽しく学ぶことができました。また、やる気につながりました。
- ・最初は不安でしたが少しずつ楽しみながら受ける事ができすごく楽しかったです。
- ・緩和ケアの事が整理できました スタッフに教育していきたいと思います。
- ・時間的な余裕を持って質疑の時間があればよかった。 時間が押していたので質問しづらかった。

【考察】

研修修了時のアンケート結果からみると講義は「分かり易かった」と答えたものが多く、研修担当者による打ち合わせを3回行い綿密に計画を練ったこと、複数の種類の研修形式を取った事、初回だったので基本通りに行った事などが要因として挙げられる。しかし、タイトなスケジュールの中で質問時間が十分に取れず講義によっては不十分な思いを示唆する結果も出ており今後も改訂を重ねる必要がある。

研修会の打ち合わせにおいては、研修担当者は全員各施設での仕事終了後の時間外での打ち合わせだったが、財団の方から会議費として提供して頂き軽食を準備する事ができたことで、遅くまで検討する事ができ感謝している。

プログラムの重要性や期待はほぼ満たしており今後の活動にもとても活かせるとやや活かせると答えている者が多いことから、自施設での緩和ケアの普及が期待できると思われる。

応募期間が短かったにもかかわらず43名の受講申請があり、体調不良により1名が欠席となったが42名は遅刻早退なく終了できた。本来ならば自己負担による研修となるため研修生と研修担当者からは日本財団からのご支援への感謝の言葉も聞かれていた。今後研修で学んだことを自施設で実施するとともに更なる研鑽を積んで頂く事を期待していきたい。

研修担当者自身からも反省会において大変いい経験になったと肯定的な言葉が聞かれており、本研修は全体的に緩和ケアの普及及び緩和ケア関連の担当者の質向上に有効であったと評価できる。

【課題】

今後がん患者が更に増加すると見込まれており、緩和ケア部門においても今回で研修を終了せず継続して行う必要がある。経済的人的負担緩和のために今後は長崎県においては、長崎県看護協会での開催を検討予定である。より質の高い研修を開催するために県下ホスピスナース及びがん関連の専門看護師・認定看護師の講師経験も重要と考えられ、研修会開催にあたっての計画を十分に検討し研修全体を見据えて質の向上を行っていく必要がある。